

勝

林

寺

報

孫との散歩

一家五人。二〇年前妻を亡くした八十五歳の私と、共稼ぎで忙しい忙しい五十代半ばの両親の間に、まだ小学生の孫二人がいます。こんな少人数の家族ですが、なかなか一家団欒のときが持てません。

夏休みに入ったある日の夕方。ほんとに久々に犬を連れて散歩に孫の二人を誘い出しました。兄ちゃん五年生、妹は三年生です。

坂の小道を息はずませて歩いていると、三年生の女の子が突然私の服の裾を引っ張って「ねー見て見ておじいちゃん。あの黄色なお花も、小さな白いお花も、みんなみんなわたしの方見て何か言つてるよ。」とあわせそう下さいねー」とてみんな言つて見たい。お山の木も林も森も、夕日に照らされながらホラみんなみんなわたしに手を振つてくれるみたい。」

女の子はびよんびよん跳ね飛びながら歌うように歓びの声を上げていました。

犬を引き連れていた兄ちゃんが、妹を振り向いて言います。

「当たり前じゃないか。自然はみんな僕たちをとりまして応援してくれているんだよ。見守つて声掛けて励まして……。ほれ見てご覧よ、今まで照らして来ていた太陽が沈まぬ前に、ご覧、もうお月さまがうつすらとでて、僕の行く方に付いて来て見守つているんだ。ねーおじいちゃんそうだろ。亡くなつたお婆ちゃんもそうだし。僕、学校の図書で「わたしが死んでも泣かないで下さい。わたしは千の風になつてあなたのまわりにふきわたるから」つていう歌を読んで、ほんとにそるんだね。」

私は妻とわかれから、時々仏法のお話を聞きにお寺に参ります。

如来さまを見つけよう。信心を私の心のなかに作り上げよう。お説教も理解しようとはかりして、時には焦つたり、もうダメだとあきらめたり。

子供はすばらしい。「千の風」に吹かれて育てられて、そしてそれを命の歓びと飛び跳ねるように生きている。

孫のことばに誘われて見上げた空の淡い月影に仏様の声。つまの面影を偲んだことあります。

負う子におえられ孫のことばに誘われて見上げた空の淡い月影に仏様の声。つまの面影を偲んだことあります。

「ああ、かならずまた会えるさ。阿弥陀さまという仏さまが会わせてくださる。ナモアミダブツ：それは、さとりの世界から『必ず救いとる』という、ほとけさまの呼び声。そんな呼び声のままに、お念佛を称えようよ。必ずお淨土で仏となつて再会できる。大丈夫。きっと会える。お父さんに会つた時、恥ずかしくないよう生きていけたらいいね」

お淨土に生まれたならば、そこはすべてのいのちが響き合い溶け合うようなさとりの世界です。だからこそ、本当の意味で「再会」できるお淨土は先立つた大切な人が、仏さまとなつて待つていてくださる世界。

（俱とも）に一つ處（ところ）で会える世界。「俱会一処（ききしょく）」とはそんな言葉です。

歓喜会

《かんぎえ》 お盆法会のことをわたし

たちの祖先はこのように呼んで、亡き人との出会いを歓びました。

今月、本願寺新報に掲載されている一文を紹介します。

仏婦ごども研修会

四十年ほどの伝統ある研修会です。

おかげさんとこどもとがほとけさまのまえで、いっしょに遊び学んで、ともに育ちます。

行事のプログラム 学習のカリキュラムは、後日評議員さんを通じてご案内します。

八月十九日

朝九時半 受付

わたしたちの身近には満州開拓団で自決なされた方が三三人を数えます。広島長崎で一瞬の原爆に焼かれた人々。降りくる爆撃弾に逃げ惑つていのち絶えた人々。

六〇年前、戦禍のなかに消された人のいちは幾千万。しかも今また戦争が、地球規模で戦われつあります。

この今、わたしたちは何を想い何をしなければならないのか。

六〇年まえのあの現実原点に思いをめぐらさなければならぬと想います。

☆戦争犠牲者ご遺族には別にご案内します

八月八日 午後1時受付

八月

葉月

のこよみ

一日 朗読ボランティアあすなろ（録音）

二日→五日 研修旅行

六日 沢田こずえ氏宅初盆

七日 森友 強氏宅初盆

田中 嘉信氏宅初盆

八日 今戻戦没者追悼

子血蘭分皿会法要

出石a地区お盆まいり

出石b地区お盆まいり

出石c地区お盆まいり

藤川 貴恵氏宅初盆

斎藤さかえ氏宅法事

湯口 勝利氏宅墓参

坪木 隆晴氏宅初盆

勝林寺

二十日 出石莊盆踊り大会

二十七日 岸下 秀一氏宅法事

二十九日 あすなろ（編集）

盂蘭盆会法要

仏婦ごども研修会

わたしたちの身近には満州開拓団で自決なされた方が三三人を数えます。広島長崎で一瞬の原爆に焼かれた人々。降りくる爆撃弾に逃げ惑つていのち絶えた人々。

六〇年前、戦禍のなかに消された人のいちは幾千万。

しかも今また戦争が、地球規模で戦われつあります。

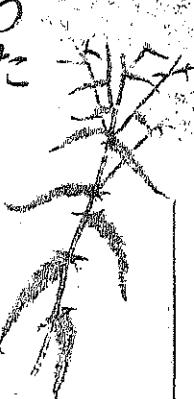
この今、わたしたちは何を想い何をしなければならないのか。

六〇年まえのあの現実原点に思いをめぐらさなければならぬと想います。

☆戦争犠牲者ご遺族には別にご案内します

八月八日 午後1時受付

いろはうた



正直申しましてこのことの起りは全く私のズルでございました。サボリの気持ちからはじめたことありました。

と申しますのは、死んだおやは、とにかく毎朝、朝ご飯の前にはお仏壇の前で「帰命無量」をやっておりましたし、それがまあおやじの遺言のようなものであります。私も小さい時からそう駆けられて来たのであります。

おやは死んで、それでとたんにそれやめにもやめられず悩んでいたそのときに、「連研」という勉強会で聞いたのがこの「いろはうた」のことです。

この「いろはうた」は、お釈迦さまの教え「仏教」のエッセンスや言うことでした。中国の学者さんや韓国の偉いお坊さんたちよりも、昔の日本人は、お釈迦様の教えを、庶民感覚のなかにうまく取り入れて「いろは四十八文字にして子々孫々、末々まで伝えて下さった。これが「仏教」や、お釈迦さまのじかの教えやでとそう習ったのであります。

シメタ。そんなら長い「帰命無量」せんでもこれでいきましょと、全然横着気分で自分勝手に決めて、今日まで人様には内緒で、この「いろはうた」を唱えています。

第一、改めて練習せんでも私ら国民学校でならつて来ましたのや。眼つぶつとつても言えます。それに短い。あんまり短いので、2・3回くりかえして上げることもあります。

始めてからもう何十年になりますか。このごろ自分も歳を取ってそろそろこの人生の事が身にしみて分かるようになってきました。

色は匂へど 散りぬるを
わか世たれぞ 常ならむ

唱えていて胸がグウーンとまる思いがいたします。

おやは死に、同級生ももう大かた死んでしまいました。そして私自身こんなに老いぽれてしましました。いつこの世から消えてなくなるか知れません。そのわたしに

有為の奥山 今日こえて

浅き夢見じ 酔いもせず

年が寄った今も、私は若いもかわらず「ほしいしたい」の煩惱の薦や茨にからまれてあります。この私に、今をどう生きるのか、今日生があると、浅き夢・幻想・歡樂に酔いしれて死を超えない……

私は、そのあとで「南無阿弥陀仏」のお念

仏を六辻唱えます。おやはと一緒にです。「いろはうた」のあとで唱えるお念佛は、如來さまの「お前を抱き取ったよ。決してはなさんよ」のお呼び声と聞こえて参ります。

この横着者の毎日のお味わいです。

牛に引かれて善光寺守まいり

法輪会会員65歳

お寺のことも研修会で聞かせていただいた古いお経のなかの童話。

◇

「ああ、こそこまできた……」
「十頭ほど、牛を引き連れた旅人がやってきました。

大きな川のほとりまでやってきた牛たちはカラカラに乾いた喉を潤そうと水辺までおりていくとおいしそうにおなかいっぱい水をゴクゴク飲みました。

「おなか一杯飲んだかね……」「さ、それじゃあ出発するぞ」。旅人は牛たちに声をかけました。今日のうちにどうでもこの川を渡つてヒマラヤの麓の村まで行かなければなりません。

旅人はそのとき、あらためてこの大きな川の流れを見渡しました。広い広い川です。どちらのなかにはまだ子供の牛も交じっています。困ったなー。」

そのときでした。杖をついた一人のおとしょりが通りかかりました。

「教えて下さい。」

「この川を渡りたいのですが、これだけの牛が溺れないで渡れる浅い所はないでしようか」

お年寄りは杖をつきながらかなり遠くまで川岸をさかのぼって行きました。

「ここじゃ。ここなら大人の牛は川底を蹴つて何とか向岸まで泳ぎつけるじゃろ」

「子牛が2・3匹います。この子どもを……」旅人は叫びました。

「そだ。子牛を渡すには、まず、大人の牛を先に渡らせる。強い大人の牡牛を。次ぎは母牛だ……」

旅人は不安に思いながらお年寄りの言うとおりまず雄牛から川へ押しやりました。見事に強い牛たちは水をかき分け広い川を渡り抜けました。母牛もそれに励まされて続きました。そして母牛は、子牛を振り返りながら「お母ちゃんの通りにするんだよモーモー」と泳ぎ切り、岸によく飛び上がつても、必死に子牛にむかって呼びかけるのです。

子牛たちはおぼつかない泳ぎで、途中流れそうになりながら母牛のところまでたどり着くことが出来ました。

「ああ、よかつたよかつた」と旅人が胸をなでおろして気づくと、お年寄りのすがたはどこに消えたのか見当たりませんでした。

お寺の先生が「このおとしよりは実はみほとけ様です。わたしたちこどもを導く教え、それが仏教なのです」と解説しましたが、私は、十六年前亡くした母を思い出しました。

死んだ今でも母は、モウーモウーとこの私を呼んでくれているのと思うと、あの母と一緒に私の口からお念佛が出ていました。